

## リベラル・アーツの教育理念

Sister Miriam Josephの*The Trivium in College Composition and Reading*をもとに

鈴木 円 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

### 1. はじめに

リベラル・アーツは、西欧で長い伝統をもつ教育のあり方である。伝統的なリベラル・アーツは7つの自由学芸からなり、それらはそれぞれ、トリウィウム (Trivium、文法、論理学、修辞学) とクアドリウィウム (Quadrivium、算数、幾何学、音楽、天文学) に分けられる。この伝統的枠組がさまざまに解釈されながら変遷し、現代のリベラル・アーツの多面的な展開につながっている。

最近、日本でも「リベラル・アーツ」という言葉を使った教育課程をもつ大学が多く出現している。しかし、リベラル・アーツの意味づけは、大学によってまちまちである。実際、リベラル・アーツを日本語で言い表すことは極めて難しく、適切な訳語がなかなか見当たらない。舘 (1995) の指摘するように、戦後改革の際、日本の大学にリベラル・アーツ概念を導入する際に用いられた「教養」という言葉も、本来のリベラル・アーツの概念を説明しうる言葉ではなかった。果たして、どのような教育をリベラル・アーツと言い得るのか、リベラル・アーツであると言い得るためには何が必要なのか、西欧の長い伝統から導き出されるその教育理念はどのようなものなのか。日本の「リベラル・アーツ」がそれらの疑問に十分に答えていると言えるだろうか。

本論文では、中世からの伝統をもつリベラル・アーツの考え方を20世紀の教育に適用しようとしたアメリカのカトリック系リベラル・アーツ・カレッジであるセント・メリーズ・カレッジで1935年から1959年まで25年間にわたって新入生向けに教えられた“The Trivium”のテキストであるSister Miriam Joseph Rauhによる*The Trivium in College Composition and Reading* (以下、*The Trivium*と略記) を取り上げ、20世紀半ばごろまでアメリカのカトリック系リベラル・アーツ・カレッジで行われていたリベラル・アーツに関する記述を読み解くことを通じて、伝統的なリベラル・アーツの教育理念がどのようなものとして捉えられてきたか的一端を明らかにしてみたい。

### 2. Sister Miriam Josephと“The Trivium”の授業

まず、“The Trivium”の授業担当者であり、テキスト*The Trivium*の著者であるSister Miriam Josephの略歴と、あわせて、なぜ、“The Trivium”の授業が開発され実践されるに至ったかの経緯を紹介したい<sup>1</sup>。

Sister Miriam Joseph Rauh (1898-1982) (本名: Agnes Leone Rauh) は、アメリカ合衆国オハイオ州グランドルフに生まれた。彼女は、高校卒業後、1916年秋にインディアナ州ノーター・デイムのセント・メリーズ・カレッジに入学してジャーナリズムを学ぶかわら、1919年9月にセント・メリーズの聖十字架女子修道会 (The Sisters of the Holy Cross at Saint Mary's) に入会した。翌年8月に修練女となり、ミドル・スクールで教鞭を執ることになる。学期中はミドル・スクールの教師として教壇に立ち、夏季には学生として学び続け、1923年にジャーナリズムの学士号を得て、セント・メリーズ・カレッジを卒業した。それから数年間、学期中は学校で教え、夏季には大学で勉強を続ける日々を

送った。1925年に終生誓願をして聖十字架女子修道会のシスターとなり、1927年にはノーターデイル（ノートルダム）大学から英語学の修士号を得た。そして、1931年、母校のセント・メリーズ・カレッジに戻り英語科の助教授に就任、新入生の英語授業である“College Rhetoric”を5コマ担当することになった。その後4年間、彼女は、“College Rhetoric”に加えて、“General Literature”、“Grammar and Composition”、“Composition and Rhetoric”の授業を担当した。

そのころ、セント・メリーズ・カレッジの学長は、Sister Madeleva Wolff（1887-1964）であった。Madelevaは、中世の大学で行われていたアリストテレス的なトリウィウムとクアドリウィウムのカリキュラムを、伝統的なキリスト教教育のモデルとして復活させたいと考えており、シカゴ大学学長 Robert Hutchins と助教授 Mortimer Adler の考えから多くの示唆を得ていた。Madeleva の招きに応じて、1935年3月8日に Adler は、セント・メリーズ・カレッジで「リベラル・アーツの形而上学的基盤（The Metaphysical Basis of the Liberal Arts）」と題する講演を行った。この講演で Adler は、リベラル・アーツの本質と目的を歴史的な文脈から考察し、中世のリベラル・アーツを、算術、音楽、幾何学、天文学からなるクアドリウィウムと文法、修辭学、論理学からなるトリウィウムに整理し、リベラル・アーツがどのようなものであるかを説明した。そして、トリウィウムについて、古代ギリシアや中世では、トリウィウムの統合と調和が常に認識され維持されていたが、15世紀以降、専門分化が進んだ結果、読む、書く、話すといった、学習のための道具に熟達する力を個人が身につけるための教育的機能が低下し破滅さえしていると指摘した。その後の質疑応答で、Madeleva は「トリウィウムやクアドリウィウムは、現代の大学でも通用するか」を問うた。その時の議論が、トリウィウムを一般教育のプログラムとするアイデアを生むきっかけとなった。

Madeleva は、英語科で教えていた Joseph を、現代のカリキュラムに適合させた新課程“The Trivium”の担当とした。そして、1935年4月から5月初めにかけて、Madeleva と Joseph を含む数名のシスターは、Adler 教授をシカゴに訪ねて学びを深め、さらに、Joseph ほか1名のシスターは、この年の夏にニューヨークを訪れ、コロンビア大学のサマープログラムで教えていた Adler のもとで研究を続けた。

Madeleva が教育課程改革の一つとしてこの課程を全入学生に課すことにした<sup>2</sup>ことを受け、1935年の秋にセント・メリーズ・カレッジに戻った Joseph が、後に大学の制度として確立する“The Trivium”の授業を任されることとなった。この課程は、トリウィウムを統合し、論理学、現代英文法、作文と文学による修辭学からなるもので、1年生全員を対象に、2学期間、週5日開講された<sup>3</sup>。既存の教科書では不十分であったため、彼女自身が1937年にテキストとして著したのが、*The Trivium*である。この課程は、1935年から1959年までの25年間、セント・メリーズ・カレッジのリベラル・エデュケーションの中核をなすものとなった<sup>4</sup>。この間、他の大学もこのプログラムの一部を採用し、彼女の書いたテキストは版を重ねた<sup>5</sup>。Joseph は自ら教壇に立ち、この授業を長く担当した。その後、彼女は、コロンビア大学に学び、1945年に英語と比較文学の博士号を取得した。さらに彼女は、1947年から1960年までセント・メリーズの英語科長として学内外で積極的に活動し、1968年には名誉教授、1969年にはセント・メリーズ・カレッジ創立125周年を記念して名誉博士号を授与された。1982年11月11日、Joseph の逝去に際し、副学長兼学部長 William Hickey は、彼女を「おそらく今世紀セント・メリーズと関わりのあったなかで最も優れた学者」と評した。

### 3. テキスト *The Trivium* の構成

テキスト *The Trivium* の検討に先立ち、テキスト全体の構成と“*The Trivium*”の授業構成を見ておきたい。テキスト *The Trivium* は11章からなる。テキストの構成は、以下の通りである。

- I. The Liberal Arts
- II. The Nature and Function of Language
- III. General Grammar
- IV. Terms and Their Grammatical Equivalents. Definition. Division.
- V. Propositions and Their Grammatical Expression
- VI. Relations of Simple Propositions
- VII. The Simple Syllogism
- VIII. Relations of Hypothetical and Disjunctive Propositions
- IX. Fallacies
- X. A Brief Summary of Induction
- XI. Composition and Reading

Joseph は第1章で、これから学ぶリベラル・アーツとはどういうものかを明らかにし、“*The Trivium*”を学ぶ意義を新入生に説明する。その後、第2章から第10章で、文法、論理学、修辞学を融合させた形で解説をほどこし、最後の第11章で具体的な作文と読解の教材を提示する構成となっている。範疇論、命題論理や三段論法、さまざまな推論などのアリストテレスのオルガノンに基づいた論理的な事項に紙幅を多く割き、さまざまな角度から言葉の機能を扱っているのが特徴的である。

次に、“*The Trivium*”の授業構成は、*The Trivium* に記載された説明によると、次のようになっている。第1 Semester・第2 Semesterとも、作文 (Composition)・読解 (Reading)・思考 (Thinking) の3つの領域に分けられている。第1 Semesterでは、作文領域で、物語 (Narration)、描写 (Description)、韻文 (Verse-writing)、文献に基づく作文：分析・解釈・比較・批評 (Composition based on literature (writing for reading) : analysis, interpretation, comparison, criticism) を学ぶ。読解領域では、叙事詩 (Epic)、風刺 (Satire)、戯曲 (Drama)、ロマンス (Romance)、短編 (Short Story)、抒情詩 (Lyric Poetry) を扱う。そして、思考領域として、*The Trivium* の第1章から第6章の理論を学ぶことになっている。第2 Semesterでは、作文領域で、説明 (Exposition)、論証 (Argumentation)、文献に基づく作文：分析・解釈・比較・批評 (Composition based on literature : analysis, interpretation, comparison, criticism) を学び、読解領域では主として説明的な文章を扱い、文学的エッセイ (Literary essay)、教育と文化に関するエッセイ (Essays on education and culture)、自伝と伝記 (Autobiography and biography)、風刺 (Satire)、批評 (Criticism)、物語 (Narrative)、哲学的な説明文 (Philosophical exposition) を扱う。そして、思考領域として、*The Trivium* の第7章から第10章の理論を学ぶことになっている。(Joseph 1948, pp. ix-x.)

“*The Trivium*”は、20世紀における英語の作文、読解の授業に、伝統的なトリウィウムの考え方を加味しようと試みる授業構成となっている。そして、テキストである *The Trivium* は、授業全体の内容を網羅しているのではなく、授業の理論的背景を考えるためのものと位置づけられているようである。

#### 4. *The Trivium*におけるリベラル・アーツ

次に、リベラル・アーツの意義について解説している *The Trivium* 第1章を検討することを通して、トリウィウムの教育理念がどのように説明されているかを見て、検討を加えていきたい。

Josephは受講する新入生に向けて、*The Trivium* 第1章でリベラル・アーツそのものの意義について詳細に説明をしている。この説明には、Josephの考えるリベラル・アーツの教育理念がよく現れている。この説明を読み解くことで、Josephがリベラル・アーツをどのようなものと捉えていたか、ひいては、当時のカトリック系リベラル・アーツ・カレッジにおいてリベラル・アーツがどのようなものとして受けとめられていたかを知ることができる。

##### a. トリウィウムとクアドリウィウム

まず、Josephは、リベラル・アーツの全体像を、以下のように説明する。

リベラル・アーツは7つの自由学芸に分けられ、トリウィウムは「言語」に関する技 (art) で「心 (mind)」に関わり、クアドリウィウムは「量」に関する技で「物 (matter)」に関わるとする。そして、トリウィウムは、思考の技である論理学、記号を用いて思考を表現する文法、言語を状況に適應させ思考を伝達する技術である修辞学の3つからなり、クアドリウィウムは、離散量に関する算数、音楽と、連続量に関する幾何学と天文学の4つからなるとする。そして、読み書き、考えるためのこれらの技は、リベラル・エデュケーションの伝統的な基礎を形成しており、これらは、知識の分野であると同時に知識を獲得するための技でもあると説明する。そして、これらの技のうち、必須なものを身につけた者に学士号 (bachelor of arts) が、より優れた熟練を示したものに修士号 (master of arts) が与えられる。そして、リベラル・アーツを身につけることが、伝統的に、医学、法学、工学、神学などの専門課程に進む最良の準備とみなされているとする。(Joseph 1948, p.1.)

Josephのトリウィウムとクアドリウィウムの違いについての説明には着目すべき点がある。両者を「心」を対象とするか「物」を対象とするかで分けている点と、「言語」に関わるものか「量」に関わるものかで分けている点である。しかも、両者をともに、art、すなわち、「技」と捉えている点が特徴的である<sup>6</sup>。また、学位が、リベラル・エデュケーションによって育まれる読み書きの力と考える力に対して与えられるとしている点も重要である。さらに、リベラル・アーツが専門課程の準備であることは認めているが、リベラル・アーツに習熟した者がその力を用いることで、どんな専門領域にも対応可能になると考えられているようである。

##### b. リベラル・アーツの性格とキリスト者の観照的生活

Josephは、リベラル・アーツを実用的な技術や7つの芸術（建築、器楽、彫刻、絵画、文学、演劇、舞踊）と区別して、実用的な技術や7つの芸術がtransitiveな活動であるのに対し、リベラル・アーツがintransitiveな活動であると説明する。そして、intransitiveなりベラル・アーツの営みを、キリスト者の観照的生活になぞらえて説明する。キリスト者の生活を能動的生活と観照的生活に分け、両者とも神の栄光が第一の目的であるが、その手段や第二の目的が異なるとする。能動的生活の第二の目的は、神の言葉を宣べ伝え、教え、あるいは病人や困窮者の苦痛を和らげることで他者に善行を施すことであるのに対し、観照的生活の第二の目的は、恵みによって神の命へとその人自身の魂を高め完成させることにある。そして、観照的生活が能動的な生活よりも優れた営みであると説明している。(Joseph 1948, pp.1-2.)

Josephは、学ぶ者自身において完結し、かつ、学ぶ者の魂を高めるような学びとしてリベラル・アーツを定義づけることで、実用や実利とは無縁のものであることを示している。その際、transitiveとintransitiveという言葉に対比させることで説明する。transitiveとは、文字通りには他動詞的ということで目的語をもつという意味である。他動詞的な行為は、主語（行為者）に始まるが、行為者を通り抜けて目的語（対象物・者）において結実する。これに対して、intransitiveは自動詞的ということで目的語を持たないという意味である。すなわち、自動詞的な行為は、主語（行為者）に始まり、行為者において完結するとする。Josephは、リベラル・アーツをintransitiveな活動と位置づけることで、その活動が自己完結的なものであることを示し、学ぶ者以外に目的となる対象を持たないという性格を強調する。そこから、学ぶ者自身の魂あるいは人格の陶冶という意味を引き出し、そのうえで、リベラル・アーツとキリスト者の観照的生活のあり方を結びつけているのである。

### c. リベラル・アーツと自由

Josephは、実用的な技が人を他人や国家、企業、あるいは自分自身の事業の下僕とすることで生計を立てることができるようにするのに対して、リベラル・アーツは対照的に、人に生き方を教え、能力を鍛えて完成へと導き、その結果、物質的な環境から抜け出して、知的で理性的な、真理を獲得する自由な生活を営むことができるようにすると述べた後、聖書の言葉「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ 8:32）を引いている。続いて、リベラル・アーツ・カレッジの目的を示す、メリーランド州アナポリスのセント・ジョーンズ・カレッジの新しい校訓“*Facio liberos ex liberis libris libraque.*”「私は書物と天秤（実験室の実験）によって、子どもを自由人にする」を紹介している<sup>7</sup>。(Joseph 1948, p.3.)

リベラル・アーツのリベラルの意味は元来、「自由人にふさわしい」という意味であるが、これをJosephは「自由にする」ことと捉える<sup>8</sup>。実用性に隷属することで生活の糧を得る生き方ではなく、自分自身の内面へと向かい人格の完成をめざして理性的に真理を探究することで自由な生き方が獲得されると意味づける。このことは、先に述べた自己の内面に沈静したキリスト者の観照的生活により神の真理に到達し自由を獲得する生き方と照応するものと考えられている。

### d. サイエンスとアート

次にJosephは、リベラル・アーツをサイエンスとアートという側面から説明する。サイエンスをその分野において「知るべきこと」、アートを「為すべきこと」とし、リベラル・アーツはサイエンスでもあり、アートでもあるとする。そして、そのアートについての正しい知識がなくてもそのアートをうまく使うことはできるとする。例として、正式な文法を教わっていない3歳の子供でも文法を正しく使うことができること、論理学や修辞学についてもそれらの説く教えについての知識がなくても効果的に使うことができることをあげている。しかしながら、明確な知識を得て、ある表現が正しいのか間違っているのかを判断することができることは、望ましいことであるとしている。(Joseph 1948, p.4.)

Josephはここで、リベラル・アーツにおける「知ること」と「為すこと」の一体性を示している。そのうえで、トリウイウムをアートの面から考え、言語技術としてのトリウイウムが必ずしも学ばなければ身につかないものではない、すなわち、知らなくても「為すこと」ができるものであることを

認めながら、それでもトリウィウムを学ぶ意味として、ある表現について、それが正しいか間違っているかを認識することができること、すなわち、「知ること」と「為すこと」が一体であることの重要性を説いているのである。

#### e. トリウィウムの道具性とコミュニケーション

Josephは、トリウィウムはすべてのレベルのすべての教育の道具 (the organon, or instrument, of all education at all levels) であり、論理学、文法及び修辞学は、読み書き話し聞くコミュニケーションの技そのものであり、思考はこれらの活動に内在しているとする。そして、読み聞くこと自体は受動的な活動と言えるが、読み手や聞き手が、読んだり聞いたりしたことに対して、同意したり同意しなかったりするということが能動的思考を伴っているとする。その後、Josephは、16世紀のイギリスをはじめ西欧のグラマー・スクールの生徒がラテン語の古典を読み、ラテン語の散文や韻文の作文の練習を行うことを通して、トリウィウムが系統的に徹底的に訓練されており、その訓練がシェイクスピア<sup>9</sup>やルネサンスの著述家の知的習慣を形成し、彼らの作品に結実したことを紹介し、新入生が受講中のこの科目が、英語の文学、作文や論理を読み書き、考えることを通して行われ、読書や作文の練習の際に、トリウィウムが生きて (vitally) 使われると説いている。さらに、紀元前2世紀のギリシアの文法学者Dionysius Thraxが、文法を韻律、修辞、文芸批評を含む包括的なものと定義していることに触れ、これらが教師と学生によって同時に実践されなければならないとし、学生に対して、教師に協力することと、能動的 (active) であることを求めている。そして、コミュニケーションは、結果として、その語源が示すとおり、なんらかのものを共有することであるとする。コミュニケーションは、真にふたつの心が会ったときにのみ起こる。もし、書き手や話し手が伝えたいと願ったのと同じ観念や気持ちを読み手や聞き手が受け取るなら (たとえ同意しないとしても) 理解したことになり、もし、読み手や聞き手がなにも受け取らないとしたら理解しなかったことになる。また、もし読み手や聞き手が異なる観念を受け取ったとしたら誤解したことになる」と説明する。そして、論理学と文法と修辞学において、この同じ原理が、書く人、読む人、話す人、聞く人を導いているとする。(Joseph 1948, pp.4-5.)

Pinkston et al. (2022) は、知的習慣を形成するトリウィウムの「道具性 (instrumentality)」と「生命力 (vitality)」が、Josephのカリキュラムの理論的根拠となっており、論理学、文法、修辞学を融合させることで学生のハビトゥスを変えようと尽力していると指摘している (p.235.)。この指摘のように、Josephは、トリウィウムが、教師と学生の直接間接のコミュニケーションの場面で、お互いの間で道具として機能することで、生命力をもって学生の能動性を喚起し、そのことが学生の知的習慣を形成し、人格の陶冶に結びつくと考えていることが分かる。トリウィウムがそれぞれ科目としてではなく、教育というコミュニケーションにおいて、一体として働く道具として捉えられていることは重要な意味をもつ。トリウィウムを学ぶとは、それらの道具の活用方法を能動的に学び、それらの道具を用いたコミュニケーションを通じて教師と学生がなにもか共有することであると考えられている。

#### f. 最高の技としての教育のあり方

Josephは、教育が物に形を与える他の技とは異なり、物ではなく心に考えや理想という形を与え、その形を学生が受動的にではなく能動的な協力によって受け取るという意味で、最高の技であると述

べる。真のリベラル・エデュケーションについて、John Henry Newmanを引いて、体が食物を吸収するように、あるいは、バラが土から栄養を吸収して大きさや活力や美しさを増すように、学生の本質的な活動とは、学んだ事実を統一された有機的全体と関連させることであると説明する。そして、事実を意味のある全体と結びつけることを常に心に留めるべきだと述べ、そうすることで、学ぶことを容易で、より興味深くより価値あるものにすると説く。全体と結びつけられない事実の蓄積は、単なる情報にすぎず、知性に重荷を与え、損なうと述べる。そして、人はかつて学び取り組んだ多くの事実を忘れても、知性は、その学びによって事実や考えと取り組むことによってのみ、得た活力や完成度を維持すると説く。(Joseph 1948, p.5.)

Josephは、教育を最高の技と位置づけ、その理由が、学生が能動的に事実と取り組み、それについて能動的に考え、それをばらばらな知識を蓄積するのではなく、有機的に結びあわせることで自分自身の知性を形作ることに意味があるとしている。リベラル・アーツのもつ本質的な意義が、学生がどのような姿勢で学ぶべきかということと重ね合わせて論じられている。

#### g. リベラル・アーツと専門科目との関係

Josephは、リベラル・アーツの各々は、狭い意味での単独の科目と捉えるのではなく、むしろ関連した科目群と捉えるべきだとしている。そして、トリウィウムは、それ自体は道具であり技能であるが、もっともふさわしい科目内容—言語、雄弁術、文学、歴史、哲学—と連携する。クアドリウィウムは数学だけではなく、多くの科学分野からなる。数の理論は、単に算数だけではなく、数学や微積分学、方程式の理論や他の高等数学の分野を含む。数の理論の応用は、音楽だけでなく、物理学、化学の多く、そして他の離散量の科学的測定の形式を含む。空間の理論は、分析的な幾何学や三角法を含む。空間の理論の応用は、建築、地理学、測量、工学を含むとする。(Joseph 1948, pp.5-6.)

Josephは、リベラル・アーツを構成する7つの自由学芸を個別に科目として捉えることはしない。トリウィウムについては、論理学、文法、修辞学を融合された道具として捉え、それが人文系の諸科学と連携していくものと捉えている。クアドリウィウムは、それぞれの科目が、さまざまな科学分野の全体を包含していくものとして捉えている。Josephは、学術が専門分化し個別ばらばらになっていくのではなく、リベラル・アーツがすべての学術の基盤となり、学術の全体性を維持させるものと考えているようである。

#### h. 核としての言語運用能力とリベラル・アーツの機能

次にJosephは言語運用能力を核として捉え、リベラル・アーツの機能について説明を加えていく。3R（読み書き計算）は、初等教育だけでなく高等教育においても核となる。言語運用能力と抽象概念を扱う能力、とりわけ数学的な量を扱う能力が、学生の知的な才覚の最も信頼できる指標とみなされていると説明する。そのうえで、トリウィウムが、心が言語によって表現を得るという意味で、心に規範を提供し、クアドリウィウムが、量（正確には外延）が物の際立った性質という意味で、物の研究の手段を提供するとする。そのうえで、トリウィウムの機能について、ともに現実の総体を構成している物と精神の研究のための心の訓練であると説く。教育の果実は文化であり、その文化をMatthew Arnoldは、「我々自身（心）と世界（物）に関する知識」と定義していると述べる。そして、最後に、キリスト教文化の「甘美と光明」が、世界と我々自身に関する知識に神と聖霊の知識を加

え、我々は真に「着実に人生を見、全体として人生をみる (see life steadily and see it whole)」ことができる結んでいる。(Joseph 1948, p.6.)

Josephは、このように、トリウィウムが総合的な言葉の教育であり、その言葉が、学生に心を表現する方法を与えんとする。そうであるがゆえに、トリウィウムが心の規範であり、心の訓練であると考えている。そして、リベラル・アーツの教育が、自分自身と世界、心と物についての知識を与え、その教育が文化を形成し、そして、キリスト教のもとでの人生の全体性を形作るものだと結論づけているのである。

## 6. まとめと今後の課題

リベラル・アーツは、西欧社会の、とくにラテン語を基盤とした古典古代の教育を淵源とした中世の教育を、その歴史の根本にもっている文化圏において成立したものである。そのため、基盤となる言語の制約を大きく受けている。西欧の学問は、リベラル・アーツの伝統のうえに成り立っているのである。リベラル・アーツは国によって地域によってそのニュアンスはまちまちであるが、その淵源を古代ギリシア・ローマ文化にもち、中世にキリスト教世界のなかで醸成されてきたという共通点をもって生き続けている。

Josephの説くリベラル・アーツが、すべての学術の基盤として不可欠な道具として機能しており、とくにトリウィウムを身につけることが学術の基礎であるとともに人格形成の基盤ともなっているという感覚は、ちょうど、日本における伝統的な教育が、全く様相は異なるといえども、漢文による古典教育を学問や人格形成の基盤としていたことに通ずるところがあるかもしれない。西欧が、教育の伝統を現在に至るまで、さまざまな変遷を経ながらも受け継いできたのに対して、日本は、明治維新と戦後改革によって、教育の伝統が分断されている。それは、日本の教育の西欧化ではあったかもしれないが、その西欧化は西欧の教育の伝統までも包み込んだものとは言い難いものであった。少なくとも、日本において日本語を用いて行う教育には、西欧的なリベラル・アーツ、とくにその基礎を形成するトリウィウムの伝統はほとんど存在する余地がない。なぜなら、文法、論理学、修辞学とともに、ラテン語世界で受け継がれてきた言葉の教育であり、日本語はその末裔ではないからである。リベラル・アーツは翻訳不能である。表面的には教養教育に似通って見えていたとしても、「教養」という漢語の含意するものとリベラル・アーツの含意するものは大きく異なっている。日本でリベラル・アーツを考えるにあたっては、リベラル・アーツという言葉そのまま借用するのではなく、西洋古典古代や中世にさかのぼって、その教育の歴史をあくまでも他者の歴史として吟味したうえで、日本において、西欧のリベラル・アーツに相当するどのような教育が、日本語を用いて可能なのかを省察することが必要不可欠なのではあるまいか<sup>10</sup>。紙幅の関係で、トリウィウムの理念を負うことにとどまり、トリウィウムの具体的な内容にまでは触れることができなかった。他日を期したい。

---

### 引用・参考文献

Adler, M. (2000). *How to Think About the Great Ideas: From the Great Books of Western Civilization*. IL: Open Court Publishing.

Cassiodorus, F. M. A. (2003). *Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Institutiones divinarum et saecularium litterarum*:



- Einführung in Die Geistlichen und Weltlichen Wissenschaften II*, Übersetzt und Eingeleitet von Wolfgang Bürsgens.  
DE: Verlag Herder Freiburg.
- Dosen, A. J. (2009). *Catholic Higher Education in the 1960s: Issues of Identity, Issues of Governance*. NC: Information Age Publishing.
- Immaculate, Sr. M. (1977). *A Panorama: 1844--1977: Saint Mary's College, Notre Dame, Indiana*. IN: St. Mary's College.
- 岩村清太. (2007). 『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』. 東京: 知泉書館.
- 久保正彰. (2011). 「English A: ハーヴァード大学一年生の文章道場」『LEC会計大学院紀要』(9), 15-19.
- Joseph, Sr. M. (1948). *The Trivium in College Composition and Reading*. South Bend, IN: McClave Print. Company.
- Joseph, Sr. M., McGlinn, M.(ed.) (2002). *The Trivium: The Liberal Arts of Logic, Grammar, and Rhetoric*, PA: Paul Dry Books.
- Mandell, G. P. (1997). *Madeleva: A Biography*. NY: State University of New York Press.
- 村上陽一郎.(2004). 『やりなおし教養講座』. 東京: NTT出版.
- Pinkston, C. R., & Wright, E. A. ed. (2022). *Catholic Women's Rhetoric in the United States: Ethos, the Patriarchy, and Feminist Resistance*. MD: Rowman & Littlefield.
- Robinson, M. (2013). *Trivium 21c: Preparing young people for the future with lessons from the past*. VT: Crown House Publishing.
- ロスブラット, S. (1999). 『教養教育の系譜: アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』(吉田文・杉谷祐美子訳). 東京: 玉川大学出版部.
- 鈴木木. (2019). 「セネカの書簡 88 におけるリベラル・アーツ批判」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』5, 35-44.
- 館昭. (1995). 「教養教育と大学カリキュラム: 教養とリベラルアーツの異動について」『IDE現代の高等教育』(370), 50-55.
- 吉田文.(2013). 『大学と教養教育: 戦後日本における模索』. 東京: 岩波書店.

---

## 後注

- 以下の参考文献に依拠してまとめた。  
John Pauly "Sister Miriam Joseph (1898-1982)" (Joseph, Sr. M. et al. (2006). pp.281-285.)  
Mandell 1997, pp.150-151.  
Immaculate 1977, pp.100-101.
- Mandell (1997) は、この改革は時代のニーズにあったものではなかったが、当時のセント・メリーズ・カレッジの財政状態が絶望的に悪かったことで、改革の反対者に対しては、Madelevaが現状のままではもはや厳しい時代を生き残ることはできないと主張することで、逆にこの改革が可能になったと指摘している。
- Immaculate (1977) は、トリウィウム 3 科目の統合と rhetoric という言葉の解釈の問題で教員の意見が分かれ、賛否両論があるなかで続けられたと述べている。
- Immaculate (1977) によれば、この課程の廃止の理由は、必要な専門知識をもった教員の確保が困難であったこと、カリキュラムの変更と革新的な趨勢によるものであるとのことである。
- 現在でも、1948年版の *The Trivium in College Composition and Reading* は入手可能であるが、このテキストを Marguerite McGlinn が編集した *The Trivium: The Liberal arts of Logic, Grammar, and Rhetoric* が2002年に新たに出版されている。

- 6 トリウィウムとクアドリウィウムの分け方については、中世のカッシオドルス（477/490頃-570/583頃）の影響があると岩村(2007)は述べている。カッシオドルスは「文法学、修辞学、弁証論」を artes、「算術、音楽、幾何学、天文学」を *disciplinae* と呼び、両者の相違を、artes が「現在と異なる仕方でありうる偶有的な事柄を取り扱う知的特性であり」、*disciplinae* が「現在とは異なる仕方ではありえない事柄を扱う知的特性である」と説明している。(Cassiodorus, *Instit.* 2, 3, 20, 岩村 2007, p.18.)
- 7 セント・ジョーンズ・カレッジのモットーを引いた理由は、リベラルの「自由にする」という意味を強調するためであろう。しかし、ここでトリウィウムの象徴と捉えうる書物が、リベラル・アーツを本 (*liber*) (木から「自由になった」樹皮から本はできている) と関係させて論ずるカッシオドルスの説を思い起こさせる。(Cassiodorus, *Instit.* 2, praef.4, 岩村 2007, p.16.)
- 8 この考え方は、セネカの書簡 88 においてセネカがリベラル・アーツについて語った「なぜ自由な勉学と呼ばれるかは、ご存じだろう。自由な人間にふさわしいからだ。だが、真の意味で自由な勉学とは、人を自由にする学問、すなわち知恵に関わる学問であり、崇高で、力強く、気宇壮大な学問だ (*Quare liberalia studia dicta sint, vides; quia homine libero digna sunt. Ceterum unum studium vere liberale est, quod liberum facit. Hoc est sapientiae, sublime, forte, magnanimum.*)」に通ずるものがある。(鈴木 2019, p.37.)
- 9 Joseph はシェイクスピア研究者でもあり、博士論文である *Shakespeare's Use of the Arts of Language* を 1947 年に出版している。
- 10 若き日にハーバード大学で学んだ久保正彰は、ハーバード大学の新生として 1949 年秋から 1950 年春にかけて履修した“English A”で受けた作文指導の思い出を語り、その最後に以下のように記している。

English A から受けた教えと恩恵は、感謝の思いとともにその後今日にいたるまで、限りなく深く広く、自分のなかに生き、続いている。私は、教養教育の一環として、日本の諸大学においても、『日本語 A』という散文原論と実践道場が広められることを、ひそかに願っている。情報技術万能の世界が若者たちを虜にしているのを目の当たりにすればこそ、80歳の思いである。(久保正彰 (2011), p.19.)